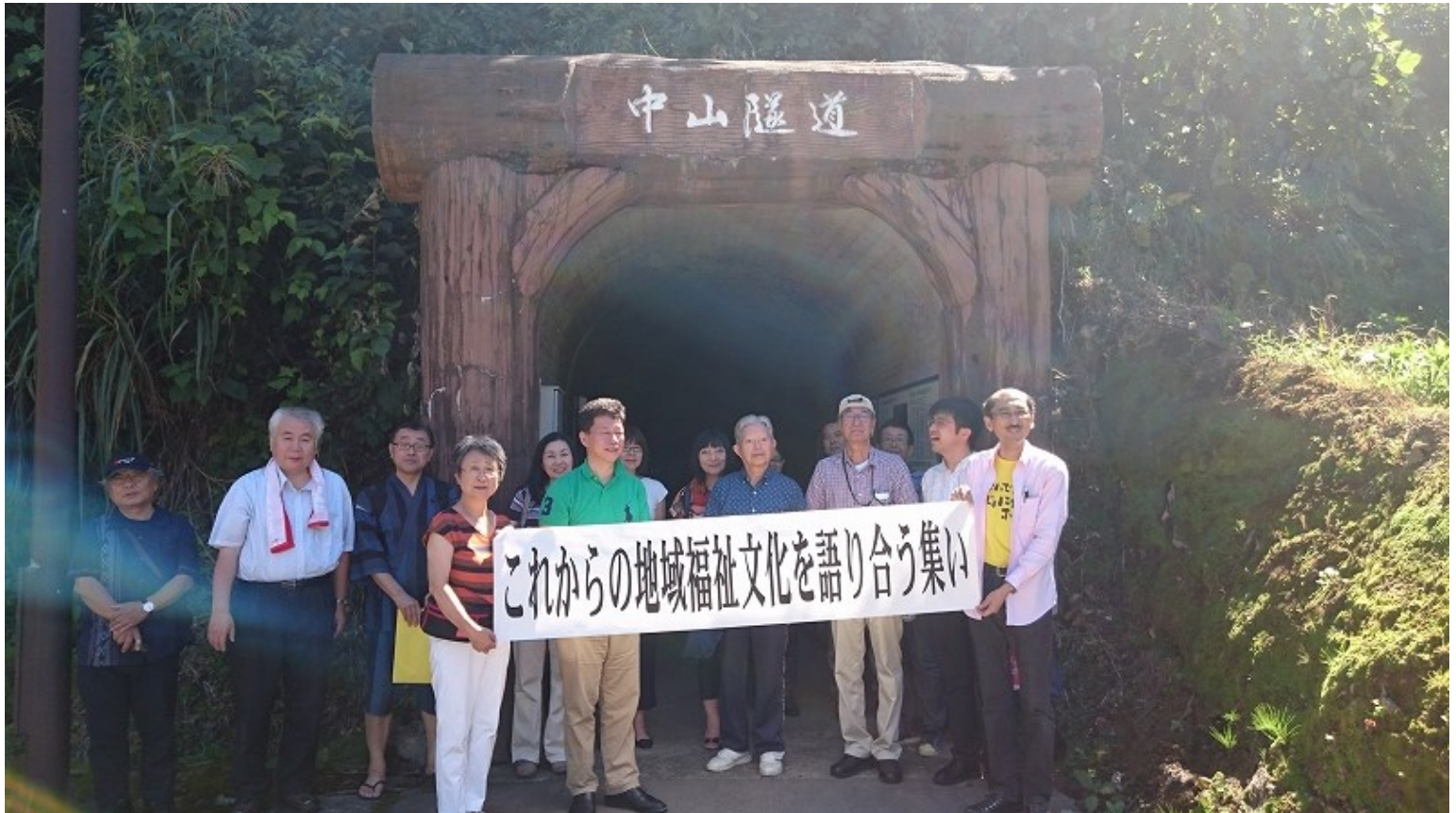


## 「これからの地域福祉文化を語り合う集い」報告



9月3日～4日、地域福祉学会と共催し、2004年に新潟豪雨と中越地震、2007年に中越沖地震を経験した新潟県を会場とし、県内外から24名の方から参加頂き開催した。

初日は、大島隆代（浦和大学）さんを講師に基調講演をいただき、被災者支援に尽力された4つの社会福祉法人から当時の対応や現在の活動について学び、今後の活動について社会福祉法人の地域貢献の観点からも考えた。

二日目は、中越地震の際に全村避難となった山古志村（現在の長岡市山古志地区）を訪ね、復興の状況について地元の復興支援員からお話を伺い視察を行った。

また、日本地域福祉学会と日本福祉文化学会とが「集い」を共催することで、福祉関係学会の連携・協働の促進を図ることを目的に開催したものであった。

「集い」にはブロック内に限らず関西からの参加もあり、参加者相互の情報交換や交流を深めることができたいへん有意義であった。参加者からは「様々な分野で災害支援に関わる活動の紹介がされ勉強になった」、「離村した青年が復興交流館で働くなど、年月が経ってもふるさとを想う思いの強さに感激した」などの感想が寄せられた。

「集い」開催前の8月下旬には台風による影響で東北、北海道が甚大な被害を受けた。学会として今後も継続した研究・実践活動が求められることを痛感している。（総務担当理事 渡邊 豊）



参加者の皆さんから寄せられた感想を掲載いたします。

-----

日本地域福祉学会 関東甲信越静岡ブロック新潟大会  
日本福祉文化学会 福祉文化現場セミナーin 越後  
「これからの地域福祉文化を語り合う集い」

関西ブロック 岡村 ヒロ子

第1日目；日本地域福祉学会 関東甲信越静岡ブロック新潟大会

**【基調講演】 「災害と地域福祉」**

浦和大学総合福祉学部 講師 大島隆代氏

先生は冒頭に、ご自身が未だに災害支援の在り方に対し、悩み、戸惑っていること、実践論はもちろんだいじだが、研究者として災害支援の在り方を学問として捉え、その実態を分析し、言語化していくことが務めであると語られた。先生の研究のきっかけとなったのが2004年の中越大地震である。「災害の時、またその後に、福祉専門職は何をしてきたのか」「『地域福祉』がなぜ災害と支援を問うことを引き受けることになるのか」の問いを私達に投げかけられた。災害時は、「なんぞや」という前に「実践」が先にあるのは当然である。実践知が検証され、災害支援に関することが法制度化されていく。多様なNPOや生活支援相談員・地域福祉コーディネーターの誕生がその一例である。生活支援相談員・地域福祉コーディネーターは共に地域の方々が担う。災害時、さまざまな派遣チーム（例；DMAT DPMT等）を構想し始めた動きは国が決めたわけではない。このように災害支援体制は、現場から生まれるものであることを認識できた。講演の中でいくつか印象に残った言葉がある。



- ①「被災者を福祉の対象者としてしまうことに危険が孕んでいる」⇒福祉関係者のみならず、広く社会の人々は、被災者＝支援を必要としている人＝福祉の対象者と見がちである。「被災したことは事実だが、被災者、被災者と呼んで欲しくない」そうおっしゃるご本人の真意を思いやる想像力が私達には求められているのだと思う。
- ②被災者と支援者の関係を、アメリカの社会学者のマーク・グラノヴェッターの言葉を引用して、「被災者と支援者の関係は『強い紐帯』ではなく『弱い紐帯』が望ましい。『弱い紐帯』からは思いもよらない情報が入り、異なる親密なネットワークの橋渡しが可能となる」
- ③「泥を見ず、人を見る」⇒泥かきボランティアはどうしても「ひたすら泥かき」に陥りやすい。「そうじゃない。被災者達の本当のニーズは違うところ（心の中）にある」。そのことを伝えるために石巻の社会福祉協議会の皆さんが一輪車の裏に書いた言葉である。終わったら一輪車をひっくり返して並べるの  
で、その時、支援者の目には、その言葉が必ず、目に飛び込んでくる。支援者は大切なことに初めて気付く。素晴らしい仕掛けである。
- ④生活再建の復興はゴールといわれるが、ゴールを決めるのはだれか、そしてどんな基準ではかるのか？  
⇒その生活復興感を高める要素として「市民性の高まり」「絆・リーダーシップのバランスがとれていること」「行政への依存度が低くなること」等を挙げられた。それらがゴールを押し量一つの基準（物差し）であり、生活の復興は当事者に自立性が生まれることなのだった。

### 【リレートーク】

長岡三古老人福祉会 高齢者総合福祉相談センター福住  
研究・研修センター長岡センター長 遠藤 真一氏

長岡市は中越地震で全村避難となった山古志村の村民を受け入れたが、長岡三古老人福祉会はその拠点となった。災害時の法人としての5つの約束事項の中で「サービスの質は落とさずに守る」「依頼ケースについては絶対に断らない」「法人全体で支えていく」の3点は特に印象的だった。施設の職員も被災している、そんな厳しい状況の中で、災害はもちつもたれつ、お互い様の気持ちで支援にあたったことへの感動もさることながら「やればできるんだ」そんな思いを強くした。やはり、バックを支える法人が揺るぎないものだったのだろう。法人の理念が、単なる言葉で終わらず、職員の仕事の姿勢として浸透していたこと、そして施設にはそれを可能にするだけのハード面が整えられていたことが資料からも読み取れた。約束事項は発信力や行動力が備わらないと実践できない。災害支援は極めて戦略的だ。

芳香稚草園専務理事 佐藤 義尚氏

僧侶である佐藤さんの研ぎ澄まされた感性とぐいぐいたたみ込んでくる話術に終始、度肝を抜かれた。  
モンゴルの貧しい子供たちをみて「なんとかしないといけないでしょう、ほっとけない」と危険を顧みず体を張って守った武勇伝や自らが代表を務める保育園の子ども達を中越水害から救った時の状況を見極める緻密な行動は圧巻だった。佐藤さんのようなリーダーが今の日本に存在することに「日本も捨てたものではない」と心底思えた。そして日頃から職員には「災害時、自分の体を張って人を守るな。自分が死んだら子どもは死んでしまう」と教えていると結んだ。

柏崎刈羽福祉事業協会事務局長 西川 伸作氏

柏崎刈羽には原発があり、どうしても福島原発事故を彷彿させる。

原発の10 km圏内に救護施設・特別養護老人ホームがあるが、防護服・ヨウ素剤・放射線量測定器は揃えてあるという。それで十分なのだろうか。

西川氏は新潟県災害福祉広域支援ネットワーク協議会を発足させ、具体的なシステム化に向けて取り組んでいる。(案)が取れて、起動しはじめる日も間近だと思う。そのキーワードを「災害福祉のネットワークへの取り組みは、自分と家族、そして地域を守ります」「災害福祉のネットワークへの取り組みは、自分の事業所・利用者・仲間を守ります」そして、「災害福祉のネットワークの構築は、災害時の福祉支援体制を作らなければならない行政と福祉事業者と住民が一緒に取り組むことが必要です」としている。最後に「災害福祉のネットワーク＝心豊か＝福祉文化の創造」とまとめ、一番必要なことは「人と人のネットワーク」と提示していた。災害時に身を守るのは、日頃からの関係づくり、つまり今、多くの地域で失われている顔の見える関係なのだという事を再認識した。今の日本は、一年を通して地震のみならず集中豪雨、土

砂崩れ、台風等々の自然災害がどこで起きてもおかしくない。災害福祉のネットワークが福祉文化の創造までに根付かせることは、西川さん共々、私達に課せられた役割である。



第2日目；日本福祉文化学会 福祉文化現場セミナーin 越後  
長岡市山古志支所やまこし復興交流おらたる、中山隊道、アルパカ牧場視察

日本福祉文化学会では研究のみならず、現場からの学び（＝実践）、すなわち現場セミナーを重視している。今回は、日本地域福祉学会との共同開催でその主旨が実現した。日本福祉文化学会は中越大震災発生翌年 2005 年に長岡市で全国大会を開催した。私は参加できなかったが、その時のフィールドワークでは山古志村の方々が生活している仮設住宅を訪問し、皆さんと交流したという記録が残っている。今回、訪問した「やまこし復興交流おらたる」の“おら”は自分、“たる”は「この辺り」という意味で「おらたる＝自分の地域」という方言である。中越メモリアル回廊では、地震のメカニズム・山崩れの様子・寸断された幹線道路を音と立体画像でリアルに体験した。地震発生直後、避難所、仮設住宅での村民の方々の様子を映した多くの写真、切々と胸の内を読み上げた短歌等々が壁面だけでなく床面まで展示されていた。

全村避難を強いられた山古志村、英断を下した村長、受け入れた長岡市、スピード感ある復興等々、今に至るまでの並々ならぬ道のり、人口減は避けられなかったという。現代風のお洒落な家が数軒、続いて目に入る。全壊したのだろうか。村の景色もこうして変わっていく。

中山隊道は人の手のみで掘られた日本一の隊道だそうだ。きれいなカーブを描いている。緻密で丁寧な仕事人達がトンネルの入り口の上に登って写真に納まっていた。武骨な風貌だった。新中山トンネルが完成するまで隣村まで結んでいた。

アルパカ牧場ではペルーのマチュピチュを思い出した。アルパカも日本の暑さは堪えているだろうと少々心配になった。目がなんとも愛らしい。もともと穏やかな動物なので人なつっこい。プードルみたいに毛刈りされているアルパカもいた。3頭プレゼントされ、今では50頭以上に増えたという。繁殖力の高さもさることながら、育成に携わった方々のご苦労を思い感動した。山古志っ子のアルパカさんが愛嬌を振りまいていた。

昼食は山古志のおばちゃんたちが地元でとれた野菜をたっぷり使って愛情込めて作って下さった山古志弁当をいただいた。山古志米のねばり、一粒残さずお腹に納めた。伝統野菜の神楽南蛮のてんぷらはピリッとして癖になりそうな美味しさだった。

“おらたる”の前ではあちゃんと孫が売っていた地元の新鮮なトマト・神楽南蛮・十全なすを買い込んだ。旅行中なのにごで食べるのだろうか・・・。

今回、中心となって企画運営して下さい下さった渡邊豊理事・稲田泰紀理事、そして実行委員の皆さま方本当にありがとうございました。深い学びを得、壮大な山古志村の自然を体感できたこと、そして何より日本地域福祉学

会の方々と交流をもてたことを喜んでおります。この経験を地域にフィードバックし、今後の活動に活かしたいと思いま



す。



常磐大学 西田 恵子さん

一日目、二日目ともに素敵なプログラムをありがとうございました。

配布された資料は、深い意味を持つものでした。新潟で丁寧に進めておられる地域福祉のすごさをあらためて知ることができました。

無くさないようにファイリングしておきます。

(一日目)

大島先生の基調講演は、地域に丁寧に足を運ばれた研究者のお話として重みのあるものでした。

リレートークのお三方もそれぞれに熱い信念をもって日頃、実践に臨んでおられ、そのことが災害時にも生きるのだということがよくわかるお話でした。

特に佐藤義尚さんのお話は国を越えて社会福祉に臨んでこられたお話でとても感銘を受けました。

本間さんがご病気でいらっしやらなかったのが残念かつさびしく思いましたが、しっかり療養して復帰していただき、またお話をうかがうこのような機会をいただければと思います。

(二日目)



山古志には乗用車に分乗して行くというのがよかったです（バスでみんなで行くのもそれはそれで意味があると思いますが）。

県外から来た者としては、疑問に思ったことわからないことを地元の方からすぐにやさしい言葉で返していただけるのがありがたかったです。

復興交流館で見た写真や鐘はあの中越大震災がどれだけ激甚であったかということを 12 年経った今、思い出させてくれました。このような場所は大切だと思いました。

アルパカ牧場が無料だと聞き驚きましたが、重ねてその意味を聞いて、これからも皆が集うアルパカ牧場でありますようにと思いました。

実は昨夜、復興交流館で買ったDVD『1000年の山古志』を見ました。

見ながら、今回、山古志を周る前に見ておきたかったと思いました。

震災後、四方が崩落した景色であったのが、今回、十年ぶりくらいにお邪魔して、きれいに整備された道路などなどであまく頭の中でつながっていなかったのです。

DVDで、仮設住宅で過ごしていた村の方々の負担と思いにあらためて接して、事前学習はその都度大切だと反省しました。



目白大学 福島 忍さん

この度、学会の機会をいただいて初めて長岡に足を運ばせていただきました。

研修センターにおけるセミナーにおいては、これまで災害と地域福祉に関する研究を積み重ねてこられた大島先生からの心に響くお話、

中越地震に関して実際に実践されている方々の様々な工夫点やご苦労されたことが伝わってきたご報告、そして復興交流館での見学やお話を通して、中越地震および中越沖地震において住民の方々が受けた被害状況やその後の生活の現状、福祉を通して人々を支えていくことの重要性を改めて学ばせていただきました。

また山古志弁当をいただけたことや、外は日本一暑かったのにびっくりするほど涼しかった中山隧道、参加者の方との交流が深まった心温まる懇親会など、様々な企画を用意していただき、とても充実した時間を過ごさせていただきました。感謝しております。

どうもありがとうございました。

---

9月4日(日)、たしか、日本で一番暑い新潟。熱い熱い思いの詰まった現場セミナーに参加でき、とてもよかったです。新潟のみなさま、本当にありがとうございました。

復興交流館での新潟中越地震での被災体験のお話、展示は、とても心を打たれました。

生活のための道として使われていた手掘りの中山隧道。どんな思いで掘ったのかなと想像しながら、涼しい涼しい隧道で一時暑さを忘れることができました。

アルパカ牧場へは、駐車場から少し離れていたこともあり、参加者の方々と共に歩いて向かいました。

道中では豊かな自然を感じながら、自然とお話をすることができました。

アルパカもとても癒されましたが、こうした環境で参加者同士が自然とふれあえるのがとてもよかったです。

そして締めは、お昼の手作り山古志弁当。とてもおいしくいただくことができました。

時間を気にせず、ゆっくりとその土地の人、動物そして自然とのふれあうことで、そこで暮らす人々の生活を少しですが感じることができました。楽しいなかにも、学びの多い現場セミナーでした。

(日本福祉文化学会 事務局 前嶋元)